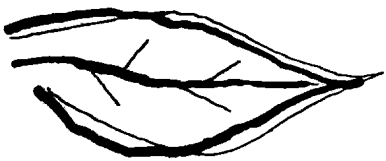
詐者の舟板

者の舟板

松本清張



筑摩書房版

詐者の舟板

昭和三十二年十二月十五日発行

定価二六〇円

著者　松本清張

発行者　古田晁

印刷者　曾根盛事

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京(29)七六五一(代表)
振替東京一六五七六八

© 扶桑印刷株式会社印刷・高陽堂製本

目次

捜査圏外の条件　1
青のある断層　35
発作　81
喪失　107
鬼畜　131
詐者の舟板　185

搜查圈外の条件

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

……殿

殿とだけ書いて、名前が空白なのは、未だに宛先に迷っているからである。或は警視庁の捜査官宛の名前になるかもしれぬ。或は、然るべき弁護士の名を書き入れるかもしれぬ。若しかすると、このまま空白で置くかも知れない。その決着はこの手紙の最後まで書かないと今の自分には決心がつかない。

その上、これが手紙であるか、手記であるか判然としない。手紙とすれば甚だ蕪雑な字句で不遜である。手記とすれば、宛名の部分を設けて個人宛の体裁に過ぎる。宜なるかな、文章を両股に掛けているのは、もっと別な意味にもなろうかとの仮構である。

これを書くに当って、先ず昭和二十五年の四月のことから誌さねばならない。今から七年前である。

当時、自分は東京の某銀行に勤めていた。三十一歳であった。勤務先の銀行は日本で一流であった。独身だし、環境に不足はなく、生活は面白かった。前途に人なみの希望をもった。

自分は阿佐ヶ谷の奥に一軒借りて、妹と共に住んだ。今はどうなっているか知らないが、当時はまだ近所に小さな雑木林が残っていて、無理に嗅げば、武蔵野の匂いが無くはなかった。自分は心愉しく通勤した。

妹は光子といって、当時二十七歳であった。十九歳の時に結婚し、終戦間際に夫を喪った不運な戦争未亡人であった。兄妹二人であるから自分が引き取っていたのである。幸い、子が無かったから、良縁があれば再婚させたいと思い、密かに気をつけていた。

妹は朗らかな性格で、歌をうたいながら、台所の片づけや洗濯をするという風である。あまり煩いと自分は叱った。銀行が退けて家の近くまで来ると、上海がえりのリルなどが聞えてきたりする。その頃、流行りはじめた唄で、妹はそれが好きであった。近くに住んでいる銀行の笠岡と一緒の時は、恥ずかしくなる時があった。

「いや朗かで結構だよ」

と笠岡は自分を見て笑った。彼は、当時四十二三で、直接の上役では無いが、別の課の課長であった。家が同じ方向なので、往き帰りにはよく一緒になった。

「おい、いい年齢をして、大きな声で唄ったりして、いい加減にしろ」

格子を閉めるや否や、玄関から自分は妹に怒鳴った。光子は舌を出したが、
「あら、私、そんなに年齢かしら」
と言った。
「そうだ。女は三十近くなれば、お婆ちゃんだ」
「いやだわ。三つも逆にサバよんだりして。だって、私をお嬢さんと呼ぶ人が随分多いわ」
それはその通りで、光子は小柄のせいか、若く見えた。結婚生活が短かかった故でもあろう、気が幼く、派手な洋服が似合った。
「そんなことを言うと嗤われるぞ。今も、笠岡さんと其処まで一緒だったが、大きな声が聞えるので苦笑していたぞ」
「あら、そんな筈はないわ」
妹は言った。
「笠岡さんは、私の唄が上手だとほめて下すってるのよ。ご愛想がいい方ね。はじめ、私を見たとき、二十か二十一だとお思いになったんだって」
「ふん、いい気なもんだ」
自分は不快になった。それは妹にもだが、いつの間にか妹にそんな口を利くようになった笠岡に対しても厭な気持になった。見えないところで、自分に係りなく或ることが進行している

のは些少でも不愉快なことだった。

それに、笠岡というのは、年齢こそ四十を出ているが、眉の濃い、鼻の大きな精力的な感じの男で、これまで女出入りが度々あって細君が苦労したという噂であつた。これは気をつけなければいけない。何か徴候が見えたら、妹に注意しなければと考え、それから様子をそれとなく観察したが、別段のことはなかった。何も無いのに、自分も殊更に言う訳にはゆかなかった。かえって自分の余計な思い違いを反省した。

それから数ヵ月して、六月の末であった。朝食のあとで光子が自分に言った。

「兄さん。明後日は輝男の命日で、しばらく墓参りをしていませんから、田舎に遣らせて下さい」

輝男は光子の亡夫で、田舎というのは山形であった。なるほど光子は二年も行っていなかった。

「そうだな。あんまり無沙汰しても悪い。それじゃ行っておいで」

自分は快く承知した。その日、銀行に出ると、給料の前借りをして、帰って光子に渡したくらいであった。

「いいのよ。お金、あんまり要らないわ」

光子は遠慮したが、自分は無理に握らせた。あとで思うと、言葉通りかも知れなかった。

あくる朝、光子は元気よく家を出た。うれしいのか、暗いうちに起きて支度しながら、例の「上海がえりのリル」を唄っていた。さすがに低声だったが、自分は叱言を言わなかった。恰度出勤する自分と新宿駅まで同行した。

「さよなら」

とホームに立って、東京行の満員電車の中の自分に彼女は手を振った。夏の朝の陽が顔の半分を光らせていた。

それが、生きている光子の姿を見た最後であった。

2

光子は、それきり失踪した。

はっきり、そう知ったのは、一週間の後、こちらから、山形の彼女の元の婚家に対して打った電報に、返電が来てからであった。光子は一度も来て居ないというのである。自分は愕然となった。

念のため、自分は山形まで急行したが、実際に来ていなかった。先方も案じ顔である。相談の上、帰ってから警視庁に捜索願いを出すことにした。年齢、身長、体重、家出当時の着衣、

特徴を詳しく書き、最近の写真を添えて提出した。悪い想像が次々と湧き、不安と危惧で眠れぬ夜がつづいた。捜索願いに、半分は期待をかけ、半分は諦めていた。もっと大きな事件に追われている警察が、そんなことに親切に構ってくれるとは思えなかったからだ。

光子が家を出る原因は少しも思い当らなかった。無論、そんな様子も無かった。もし、行方不明となったら、自らの意志では無く、他から強制されたものだった。女ひとりを旅立たせたことに自分は後悔を感じた。といって、二十七にもなるのだから、まさか附添う必要も無いのだが、こうなってみると、ついて行かなかったことが重大な手落ちのように悔まれた。日が経つにつれ、最悪のことしか考えられなくなった。自分は急に新聞を三種とって社会面の記事を毎日さがした。それは怖しくもあったが、見ない訳には行かなかった。

光子が出発して四日目くらいであったろうか、ちょっと会わなかった笠岡に、朝の出勤の途中に出遭ったことがあった。

「このごろ、妹さんはいらっしゃらないのですか？　君の留守には戸が閉っているが」

彼は訊いた。

「ええ、田舎に行っています」

「ほう。田舎はどちら？」

「山形です」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

まだ光子が失踪したと分っていない時であった。自分は、彼と肩をならべて電車の吊皮にぶら下り、世間話をしながら銀行まで同行したことであった。

いよいよ光子が行方不方と判ったとき、笠岡も自分に見舞を言った。それは銀行の同僚に知れたことだったから、彼もほかの者と同じように見舞をいったのだ。

「妹さんが大変だそうですね」

彼は心配そうに、低い声で言った。

「どうもご心配をかけます」

「警視庁へ捜索願いを出しましたか？」

「え。出して置きました」

「ただ出し放しでなく、上の方に知った人があれば、頼みこむと親切にやってくれるそうですよ」

彼はそんな助言をしたりした。それから、朗らかでいい妹さんだったが、早く無事に帰られるといいがね、と慰めた。

光子の消息が分ったのは、家出してから二十一日目、捜索願いを出してから十日目であった。やはり捜索願いに効果があった。

「該当者らしいのが、I県のY警察署から言って来ている。変死体では無いので、写真は送っ

て来ていないが、行って見るかね？」

呼び出した係官は言った。Y町というのは北陸の有名な温泉地である。山形とは方角が逆なので、自分はためらった。

「届出での人相、体格、着衣とが似ているのだ。温泉旅館で急死したそうだが、身許が知れないので町役場で仮埋葬してある」

その言葉で、自分はY町まで見届けに行く決心になった。夜行で発ち、翌日の午後に到着した。

三方を山で囲まれ、清冽な川を一筋流している民謡で名高いこの温泉町も、自分には悲しい町となった。役場の係員の案内で、共同墓地の一隅にある仮埋葬場から発掘したのは、紛れもなく光子であった。棺の中の遺体は腐爛していたが、原形はまだ残っていた。自分は確認して、歔いた。

別に保存された洋服、下着、化粧道具を入れたスーツケース、ハンドバッグなど見たが、悉く光子のものであった。

「何か無くなった物はありませんか？」

係員がいったので自分は調べたが、ただ一つ、いつもハンドバッグに入れていた光子の名刺入れが無かった。

「名刺入れがありません」

自分が答えると、係員は、立会いの他の者と顔を見合せて妙な表情をした。一人がスーツケースの一カ所を示した。名刺(カード)挟みが毟られていた。そう気づくと、光子の頭文字を縫いつけたハンカチも見当らなかった。

そこで初めて事情をきいた。光子は狭心症を起して旅館の座敷で急に絶息したのであった。心臓はかねて悪かった。午前五時ごろ発作を起し一時間後に医師が駈けつけた時は鼓動が無かった。

「お一人では無かったのです」

係員は遠慮そうに言った。もうおよその想像はしていたが、自分は顔が火照って、まっすぐには上げられなかった。

旅館に行って迷惑をかけた詫びを言った。主人も女中も間(*)の悪そうな、気の毒な顔をして事情を説明してくれた。

光子は七月一日にこの旅館に男と二人連れで投宿した。それは光子が自分と新宿で別れた翌日だから、東京から真直ぐにここに直行したことになる。その晩は何のことも無かった。気に入ったから、もう一泊すると二晩目に泊った払暁に不幸な発作が起ったのであった。

大騒動になると、男は大いに狼狽した。医師が臨終を告げ、女の顔に白い布が女中の好意で

かかると、男は俄かに洋服に着替え、郵便局に行ってくると宿をとび出した。宿の者は電報を打ちに行ったのだろうと思っていた。いつ、男が折鞄をもって出たのか、いつ女のハンドバッグから名刺入れを抜き取ったのか、混雑の時とはいえ、宿の者は気がつかなかった。それきり男は戻らなかった。駅に走ったものと思いこんでいた。

宿帳の記名は偽名であった。電報は符箋がついて返ってきた。宿では仕方なく、役場に新仏を引き取って貰った。

「あんな、薄情な、ひどい男はいない」

女中たちは今日まで、罵りつづけてきたと言った。

自分は、その男の人相を詳しく聞き、宿帳につけた筆蹟もみた。旅館には光子と二人分の料金に礼を添えて払い、翌日、妹を骨にして東京へ持って帰った。

3

笠岡勇市ほど卑怯な男は存在しない。

光子が誘惑されたのは、彼女にも半分の過誤があるから、それは咎めない。ただ温泉旅館で光子が急死すると、ひとりで遁げ還った行為が憎いのである。彼はこの不慮の突発事故のため、

細君をはじめ、自分にも、世間にも万事が暴露する結果を恐れたのであろう。彼にとっては、光子の急死は思わぬ災難であり、色を失って逃げた心理は解らなくはない。然し、光子の兄である自分は宥せない。光子は死後までも彼に侮辱されたのである。己の行為を匿すため、彼女の名刺を奪い、身許不明人として死体を遺棄して逃走した卑怯さに自分は憎悪を燃やした。思うに彼が何喰わぬ顔で、妹さんは留守のようですな、と自分に挨拶したのは、Yから遁げ帰ってきた翌日でもあったろうか。その後、捜索願いについての助言も、事を悟られまいとする偽装であった。

旅館で聞いた人相も、宿帳の筆蹟も笠岡のものであった。自分は銀行で彼の書いた書類をひそかに検べたが、癖のある字体は全く同一であった。聞くところによると、彼は七月初めから一週間の予定で郷里に帰ると称して休暇をとっていたそうである。符節はすべて合っていた。

光子の葬式の時は、笠岡はさすがに顔を見せないで、微恙を理由として細君を代理に寄越した。何も知らない細君は、狐のような顔をして丁寧に霊前に礼拝した。自分は、妹は親類先で病死したと取りつくろって置いた。銀行の連中も、多少の疑問は抱いていたらしいが、自分はそれで押し通した。妹の人格のためでもあり、自分の羞恥のためであった。まだ、ぼんやりとではあったが、もう一つの考えからでもあった。

笠岡勇市に会ったのは、葬式のことが済み、自分が出社した第一日であった。自分は彼を屋

上に同行することを求めた。そのときから彼の顔色は変っていた。

屋上には人の姿が無く、風が吹いていた。強い陽をうけた東京の街衢が眼下に展がっていた。鈍い歌声のような騒音が匐い上ってくる以外は、無機物のようであった。

笠岡は紙のような顔色をしていた。強い日光の照射ばかりでないことは分っていた。彼は眼も、鼻も、口も歪めていた。Yでの行動を詰問すると、彼は頑強に否認した。関西の郷里に帰っていて、全く関りの無いことだと主張した。自分は嗤い、

「そんなことを云うなら、Yの旅館の女中を連れて来て会わせてもいいか？」

と云った。それで彼は沈黙した。

彼が告白をはじめるまでには、多少の時間を要した。風が渡り、彼の少ない頭髪を乱した。宥して下さい、と彼は言った。それが自白の皮切りであった。

光子との間は二ヵ月前から成立していた。これまで五回の交渉があったと言った。自分は、己の迂遠に愕き、腹が立った。瞬間、光子まで憎くなった。旅行は、無論、両人で示し合せたのであった。自分は給料の前借を光子に与えたとき、彼女は遠慮したが、実はその分の旅費を彼が出したのであった。

自分は、妹をそのような淫奔な女とは思っていない。かなり陽気な性格ではあるが、一面、地道なところがあった。結婚生活は僅かな期間で、夫を失ってからは自分の家に同居し、友達

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c